

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

## ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

### 第八話 大気浴

わたしたちが滑稽に見えるのはたぶん傘のせいだろう。

囲い地の中に入れてもらい、大気浴と称して「裸」に近い恰好でうろついている人たちを初めて見たときに、傘をさしているから「ちび黒サンボ」のように見えるんだな、とわたしは思った。

ハンカチほどの布きれしかまもってはいなくせに、持ち手の先に赤インコの頭がついた緑色の綿の傘なんかさして、つんと澄まして歩いている姿のなんとまあ滑稽なこと。「大気浴場」には木が一本もない。この施設のご自慢といえは簡単な作りの木の小屋とお風呂場と、二つのブランコと、二本の棍棒くらのものだ。そのうちの一本は、ヘラクレスかドイツ軍の置き土産といった感じだが、もう一本はゆりかごの中で赤ん坊がおもちゃにしてもよさそうな代物だった。

そして、どんな天気であろうと大気浴は行われる。歩くこともあれば、何人かでもたまって坐り、自分たちの病気や、体重や、先祖から受け継いだあまりありがたいとはいえない体質についておしゃべりすることもある。

周りには高い木の塀がはりめぐらされていて、松の木が塀の中をのぞくような格好でこちらを見下ろしている。お互いに肘をつつきあって、新参者のわたしを威圧しているといった風情だ。右側の壁の向こうが男性用で、壁の向こうからは、木を切り倒す音や、鋸をひく音や、重たいものを地面にドスンと落とす音にまじって歌声まで聞こえてくる。そう、男たちのほうがるかに真剣だ。

最初の日は足を出しているのがなんとなく恥ずかしかったので、時計にかこつけて自分の小屋へ三度ももどってしまったが、三週間も一緒にチエスをしていた女性に知らんぷりをされたので、思い切ってそのへんでかたまってしている人たちの中に入っていつてみることにした。

わたしは地面の上で丸くなりながら、ハンガリーからやってきた女性の話を聞いていた。それは二番目のご主人のために立派なお墓を買った話だった。

「天井はアーチ型で」ハンガリー女性が言った。「黒くてしつかりした欄干が付いているし、中は歩き回れるくらい広いのよ。最初の夫の弟が美しい花輪を贈ってくれたもんだから、そのそばに二人の夫の遺影を飾ったの。引き延ばした家族写真や、最初の夫が結婚のお祝いにもらった、金文字で書かれた祝辞なんかと一緒にね。ええ、お参りにはよく行くのよ。そうねえ、お天気がよかつたら、土曜日の午後なんかには歩くにはちょうどいい距離かしら」

ハンガリー女性は突然仰向けになり、六回深呼吸をして再び起きあがった。

「二番目の夫は」彼女の声は意外に明るかった。「死ぬ時にひどく苦しんでね。最初の夫は家具屋の馬車に轆かれてあつけなく逝っちゃったんだけど。それがあなた、新調したばかりのチョッキを着てたうえに、ポケットから五〇マルクも盗まれたのよ。ところが、二番目の夫は六十七時間も苦しみに耐えてね、わたしはずっと泣きっぱなしだったわ。子供を寝かしつけるときでさえ涙が止まらなくて」

ロシアからやってきた娘さんが、切りそろえてカールさせた前髪をわたしの方に向けてた。

「あなた『サロメ』のダンス踊れる？」その娘さんが言った。「わたし踊れるのよ」

「まあ、それはすごいわ」とわたし。

「踊ってみましょうか？ 見てみる？」

娘さんははじけたように立ち上がると、身体をくねらせて十分近く踊り続けた。踊り終えると息を弾ませながら顔にかかった髪を振り払った。

「どう？」娘さんが言った。「すごい汗だわ、お風呂にいつてくるわね」

わたしの向かいにはおそろしく日に焼けた女性が寝ていた。仰向けになって、おでこの上で両腕を交差させている。

「今日はどれくらいここにいたの？」誰かがその女性にたずねた。

「ああ、この頃は一日じゅうここで過してわ」彼女が答えた。「もっか自分であり出した治療法と生野菜と木の実だけの食事を実践しているところなの。おかげで、日に身体がしゃんとしてくる感じだし、気分も爽快よ。ここにいてるだけじゃ何にも期待できないでしょ。頭の中に豚の細胞や牛の切れ端を詰め込んで歩いてるだけだもの。まったく、よくこれで世の中がおかしくならないと思っわ。わたしの食べるものはいったってシンプルよ」彼女はわきに置いてある小さな袋を指差した。「レタスでしょ、人参でしょ、じゃがいもでしょ、それに木の実があれば十分、栄養の面から言っても理想的だわ。害のない大地から収穫したものを水で洗って食べるだけ 新鮮で汚染されていない状態だね」

「ほかには何も食べないの？」わたしは思わず声を上げた。

「お水くらいは飲むわよ。あと、夜中に目が覚めたときなんかはバナナを食べることもあるわね」彼女は体の向きを変え、片肘をついた。「みんなが食べ過ぎてるのよ！」彼女が言った。「あれだけ食べてよく平気でいられると思っわ！ 贅肉をだぶつかせてい

たら、精神の炎なんか燃やせやしないでしょう」

わたしは彼女の視線が自分の身体に移らないことを祈った。そしてそろそろ時間でも見に行こうかと思っていると、サン」の首飾りをした娘さんがやってきて輪の中に加わった。

「お気の毒に、ハウプトマンさん今日は来られないんですって」その娘さんが言った。「からだじゅうに湿疹ができてたわ。きのう葉書を二枚も書いたせいね。少し興奮しちゃったんだわ」

「なんて神経の細い人かしら」ハンガリー女性が口をはさんだ。「でも、とても感じのいい人よ。前歯が二本とも入れ歯なのにはびっくりしちゃったけど。ただ、娘さんたちにあんなに短いセーラー服を着せているのはどうかしらね。ベンチに坐るときに足なんか組んじやって、見ているこっちの方が恥ずかしくなるわ。ところで、アンナさん、午後はどうするの？」

「あつ、そうそう」珊瑚のネックレスをした娘さんが答えた。「中尉さんにランドルフへ行かないかって誘われてたんだわ。お母さまのために卵を買いに行くんですって。八つ買つと一ペニーおまけしてくれるお百姓さんを知つてるとかで」

「あなたアメリカ人でしょ？」野菜婦人がわたしのほうを向いて言った。

「いいえ」

「じゃ、イギリス人？」

「でもないわ」

「いいえ、絶対にどちらかね。隠したって無駄よ。一人で歩いているところを何度も見ているんだから。あなたは」

わたしは立ち上がってブランコに乗った。さわやかな心地よい風がわたしのからだを勢いよくなでていった。見上げると、青い空にうっすらと白い雲がかかっている。松林から強い香りが漂ってきた。松の枝がリスミカルに音を立てて揺れていた。わたしは何も考えずに自由と幸福をかみしめていた。そう、まるで子供のように！ 草の上で車座になっている人たちにべーっ舌でもだしてやりたかった。頭を寄せ合い、もっともらしい顔をしてひそひそ話をしているあの人たちに向かって。

「気をつけなさいよ」どこかの小屋から大きな声が飛んできた。「ブランコに乗っていると気持ちが悪くなるわよ。あたしの友達なんか三週間も食べられなくなったのよ」

わたしはお風呂場へ駆け込んで水を浴びた。

服を着ていると、誰かが壁を叩いた。

「知ってる？」と声が言う。「となりの大気浴場に男が一人は住み着いていてね、脇の下まで泥に埋まって、三位一体なんか信じないって言ってるそうよ」

大気浴場では傘がせめてもの救いである。今ではわたしも、夫の「暴風雨」用の傘を持っていき、隅の方に坐ってその陰に隠れるようにしている。

だからって自分の足を恥じているわけではないので、ゆめゆめ誤解のないように」。